

先史洞窟内の赤色手形の謎

齊藤 守弘

このタイトルを一読して、すぐにイメージが湧く人は少ないのではないか。

でも洞穴内、旧石器時代にさかのぼる原始絵画で有名なアルタミラやラスコーなどと、同じ頃の洞穴のことだといえば「ああっ、あれか」と見当がつくのではないか。

そうした二万年、三万年と遡る太古の洞穴内に、なんの意味なのかマンモスやバイソン（野牛）・ウマなどと共に、人間の手形が印されていて、一体いかなる動機のもとにそんな手形を暗い洞穴の奥の堅い岩肌の上に残したのか。

それらの手形はいずれも描かれた動物たちのかたわらに添えるように付され、両者密接な関連があるのが了解される。

だから、その手形を付した動機、先史人を暗い洞穴へと駆りたてた内心のやむにやまれぬ衝動が判れば、一緒に描いた大小各種動物の絵の謎も解けるのではと見当がつく。が、まだ世界の考古学界で誰にも解けていない。

ところが近年になってやっと、その謎を解く手掛かりが得られた。しかも驚くことにその手掛かりは日本の縄文時代にあった。今を去る4500年前、長野県茅野市棚畑遺跡で発見され国宝土偶第一号となった愛称「縄文ビーナス」こそ、遠く隔たったユーラシア大陸の西の果て、今のフランスやスペインの地で氷河時代末に大流行した洞穴内の先史動物絵画と赤色に限らず黒、白もある先史人手形の謎を解く鍵となったのである。

どこが鍵か。国宝土偶第一号には、頭部をぐるりと取り巻く奇妙な文様とも文字ともつかぬ不思議なデザインがほどこされている。

このデザインの謎に挑戦した私は、それらが縄文時代の〈神〉を表す記号であると2003年、神歴研の4月20日の講演で明らかにし、それを〈縄文記号〉と命名した。

まだ無文字社会であるから文字とは違う。いわば数学のプラス、マイナス、イコールのような一般社会共通の約束事をシンボル図形にしたものと思えばよい。

国宝土偶第一号では、その約束事は彼らに共通する神であったのだ。しかもその神は唯一神ではなく、互いに同格の三大至高神であるのが判った。

幸い日本ではその三大至高神の名称が記録され残っている。記紀神話に出てくる日本最古三大神。その神名の表記が古事記と日本書紀で異なるので対比してみる。上段が古事記、下段が日本書紀である。だがこれでは日本人独特の宗教・日本神道の神と限定して見られ、その重要性が誤解されるうらみがある。で、もっと学術的な世界通用の神名に替える。

さらに詳しく国宝土偶第一号の謎デザインを分析した結果、なんと縄文人はそれら三大至高神を誰でも予備知識なく理解できるよう数値でシンボルすることを考えた。

古事記	あめのみなかぬしのかみ 天之御中主神	たかみむすひのかみ 高御産巢日神	かみむすひのかみ 神産巢日神
日本書紀	あまのみなかぬしのみこと 天御中主尊	たかみむすひのみこと 高皇産靈尊	かみむすひのみこと 神皇産靈尊
学術的神名	極孔神	男性月神	翼あるヘビ(竜)

これは実に独創的な表示法であり、先史人はひょっとして神の名を口にするのを、神を汚し、神を冒瀆すると考え、意識的に避けたのかもしれない。私はそれを縄文神聖数と命名。

そして世界で唯一、日本列島ではそれが今も生きて実用化されている。すなわち神社の屋根を飾る堅魚木である。古く古墳から出土する家形埴輪に、この堅魚木が認められることから、縄文時代から連綿として縄文神聖数の伝承は保持されてきたのが、そこから判明する。

国宝土偶第一号の謎デザインの究明（2004年5月16日神歴研講演）から、縄文記号と縄文神聖数との関連が明らかになった。それを一目で掴めるよう一覧表にしてみた。

神名	縄文記号	縄文神聖数
極孔神	⊙ ○ ∩ (左巻渦・単円・逆S字形)	2
男性月神	⊙ ∩ S (右巻渦・逆C字形・S字形)	3
翼あるヘビ	X Y ∪ (昇竜と降竜・蛇の舌形・北斗七星)	7

日本の縄文時代は新石器時代で、1万5000年ほど太古まで遡るといわれる。

けれど全地球的に見れば、この草創期縄文時代はまだ狩猟採集の暮らしに明け暮れる人類史の曙の時代であった。この常識がつい五年ほど前、轟音をあげて大崩壊した。トルコ南西部ギョベクリ・テペ遺跡の発見である。

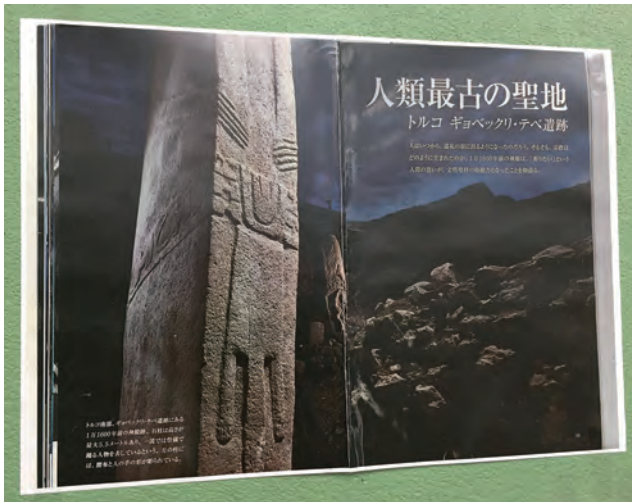
この遺跡を発掘したドイツの調査隊によると、まだ山野を放浪し動物を狩り、路傍の木の実をもいで生活したと思われた先史人が意外や、とんでもない石造の神殿文明を築いていたというのだ。

早くも大きな石材（石灰岩）を加工し、そこに見事な彫刻をほどこしたばかりか、高さ5メートルの石柱を立て、その上に大きな枕石を載せて、その周りを小さな石でレンガ状に積んだ石の壁で二重、三重に囲んで直径30メートルほどの円形をなし、そのうえ7メートルある細く狭い入口通路状の突出部を取りつけた。不可解なことに、この入口を入っても中心部には壁があって内側へ入れないのだ。ハシゴを架けて入るとしか思えない。

全体が柄鏡形をしたこの石造構造物が世界最古の神殿であるのは間違いない。古代エジプト文明でもメソポタミア文明でも、最初の神の住居は堅固な石造建築にしてあるからだ。

びっくり仰天なのは、なんとなんと、この最古神殿は私が国宝第一号の謎デザインの解読から推測した縄文記号と縄文神聖数の存在とその使用を裏づける、これ以上ないズバリの遺物による証拠が見つかった。私の21世紀初めの2001年9月神歴研で発表以来およそ10年、やっと見つかったのだ。それもこの上ない見事なたちで、である。

この謎の構造物の中心部に、相対して直立する二つのT字型巨石があり、その石柱の縦方向に人体像がレリーフしてある。その角の腹のあたり、ちょうどベルトの位置のところに複雑な図形が描いてある。なんとそこに見たのは私命名の縄文記号と縄文神聖数であったのだ（写真参照）。中心部の大きなU字形は明らかに男性月神表示の縄文記号・逆C字形の縦方向への変形。その内部にすっぽり入った円形は極孔神の縄文記号以外の何ものでもなく、その同定が間違いない証しは円図形の上に細線を



写真は1万6000年前
ギョベクリ・テペ遺跡の巨石柱のデザイン
縄文記号・神聖数（神歴研が世界初発表）で解け、
それが赤色手形謎解明の手掛りとなる。
写真は：ナショナルジオグラフィック
2011年6月発行より

形2個こそ、間違いない極孔神をシンボルする縄文神聖数2の表示なのだ。

日本の縄文と共通する神のシンボル表示。でも、この遺跡は日本列島から西方へ、遠く1万キロ余り、トルコ南西部に所在する。時間空間を超越した両者のこの一体性はそもそも何を意味するのか。その背後にあるのは地球人類の地域を越えたグローバルな一体性である。

地球の水河時代が終わり、今に続く後氷期の世界の始まる時代。人類はやがて狩猟採集生活を脱し、次なる農業家畜時代へと移行する大きな画期の時であった。トルコのギョベクリ・テペ遺跡はその移行期の社会の在り方を記録する遺跡であり、**日本の国宝土偶第一号は狩猟採集時代の人々の心の在り方を伝承し、それを記録にとどめる世界唯一の遺物である**といってよい。両者を総合し、はじめて旧石器時代に生きた人々、その永遠に失われたと思われた心の内を垣間見ることが可能となる。

ここまで理解したら、先史洞穴内、赤色手形の謎を解く手掛かりにやっと到達する。なぜなら、ギョベクリ・テペ遺跡を建設した人々と国宝土偶第一号の謎デザインをほどこした人物は、共に共通する先史人の心の表現を伝承し、それを形に表す作業を行った。とすれば同じ先史人の心境を日々有していた狩猟採集の先史洞穴人たちも同じ心境下にあったと言えないか。

であれば、手形の5本の指とは縄文神聖数表示ではないのか。極孔神の神聖数2と男性月神の神聖数3の合計は、なるほど手の指5本の5にほかならない。日本の神社の堅魚木でも5本が圧倒的に多い。それは生命の死と再生、あの世からこの世への再誕生を意味する。そこでズバリ言おう。

先史動物絵画は従来の常識、狩りの豊猟を祈願する呪術ではなかった。ほかでもない、先史人たちは自分の殺したマンモスやバイソンなど大型動物のその冥福を祈って、ひたすらその死を弔い、彼らの命が再びこの世に再生し、生き返ることを心より祈願したのだ。

「そんな馬鹿な！まだ原始時代の先史人が殺した動物の後生大事を祈り、あんな見事な傑作絵画をわざわざ暗い洞穴に、精根込めて描こうとはとても信じられない。他にもっと直接的な証拠がないか。」もっともである。三つ裏づけを挙げる。

①洞穴内に描かれた大型動物の典型、バイソン。絶滅せず現存するバイソンの死体の写真と厳密に比

二本付してある。まぎれもない縄文神聖数2の表示である。

ギョベクリ・テペの神殿を築いた農業以前、狩猟採集生活の先史人が縄文人と同じく無言のうちに至高神を表示する縄文記号と縄文神聖数を常用していたのは今や疑いえない。

縄文神聖数についていま少し、ギョベクリ・テペの巨石柱のレリーフを探ろう。まるでダメ押しするのは、このバックル状デザインを囲む左右二つの図形による数値表示だ。

右には工字形が2個、つづく左側に同形がもう1個と計3個、まぎれもなく中央、男性月神の縄文記号・逆C字形を補い説明する縄文神聖数3の表示である。そしてその下にある横工字

較した結果、筋肉各部の弛緩徴候 死後硬直の様子など、その特徴が明らかに死後のバイソンを描いているとの論文がすでに発表されている。(R & O、モリス著『人間とヘビ』2006年)

②南フランス・ペシュ・メルル洞穴では二頭のウマを左右逆向きに描いていて、その背と尻の部分にネガティブ・ハンド（空白型手形）を付している。普通の手形はポジティブ・ハンドという。対してネガティブ・ハンドはパイプに色素粉を詰めて、壁に当てた手の甲の上から吹き付け、はずすと、5本の指の形が飛び散った色素の中に、そこだけ空白になり、くっきりと浮かび上がる。先史洞穴人の付けた手形はみなこのネガティブ・ハンドだった。つまりそれは実体ではなく、実体の反対、靈魂の世界を表す。

③また洞窟内ネガティブ・ハンドにはギョベクリ・テペ遺跡のバックル状の謎デザインから推測すると、どうやら性別があるのが判明する。謎のバックル形の上方、やや離れて左右から摺むように5本指がレリーフされているが、同じ人間の指ではない。向かって右の手指は太く骨太で、見るからにゴツく、男性の指のようだ。対して左の手指は細長く華奢で、女性の指とみてよい。この見方を裏づけるのは下の工字形の神聖数表示である。縄文神聖数表示には、2は極孔神で女性なのだ。

まさしく洞穴先史人は殺したウマの絵に、男女を表す二つのネガティブ・ハンドを付すことにより、男女二柱（雌雄）の最高神の靈力がそこに働きかけ、男女交合の原理で狩猟のとき、殺した大型動物たちの靈が蘇り、再びこの世へ再生するを祈願したのだ。

驚くなかれ、彼ら洞穴先史人は、私が11年前の2005年7月、神歴研で講演した「盃状穴と失われた縄文神学」で推測したのと全く同じ神学思想のもと、洞穴の原始絵画を描いていたのだ。では、その縄文神学の肝心要、盃状穴はギョベクリ・テペに果たして在るのか。勿論のこと、見つかった。極孔神のシンボル図形・円形に巨石を積んだサークルの内部に向かい相って立つT字形の石柱。その直立柱の上に載る枕石をクレーンで持ち上げた際、ついに発見された。直立柱と接した部分、隠れていた部分に無数の盃状穴がうがたれていた。他に神殿石材の切出場でも、放置された石材におびただしく見つかった。

国宝土偶第一号では天を表す丸く平らな頭頂に、星空が左向きに回転する日周運動を示す左回りの大渦巻を描き、その中心部が丸い凹みになっている。この凹みこそ極孔神の本体シンボル、盃状穴表現なのだ。



写真は：文化庁発行パンフレット
日本で見つかったギョベクリ・テペ遺跡
レリーフと類似の深鉢デザイン。縄文中
期（4500年前）で、ギョベクリ・テペの
7000年後、文化伝播ではない。
福島県東町遺跡、14年出土。